

「自分より大切なものができる」

子供の頃は、自分が周囲から大切にされていることをよく知っているものだから、「このくらいは許されるだろう」「もっとこうしてほしい」とばかりに余計わがままにふるまいます。しかし、そのような自己中心的なわがままなふるまいがいつまでも許されないということにも、だんだんと気付くようになってきます。しかし、親の傘の下にいる間はやはり子供のときの感覚が抜けきらず、自分の身の回りのことをしてもらって当たり前という気持ちでいることの方が多いのではないかと思います。だから、全てしてもらっているのに、それに対する感謝の気持ちよりも不平不満の方が強くなっていきます。自分で働いて稼ぐようになっても、その使い道は全部自分のためのものです。ところが子供ができれば、それが一変してしまうと言われます。今まで自分のペースで行動し、自分にとってよいか悪いかさえ考えていればよかったものを、急に時間もお金も自由にならなくなります。後からやってきた小さき者の機嫌をとって毎日を送らなければならなくなります。主役の座から一挙に引きずり下ろされ、自分の不平不満を言うどころではなくなってしまいます。

このように、自分より大切なものができる初めて、人は生きることと真剣に向き合い、何が価値あるものかを知ることができるものだと思います。自分のことより自分以外の者のことを最優先して初めて、人は優しく懸命に生きることができるようになるのだと思います。我が子をもつというレベルまでにはいかなくとも、ボランティア体験をしたり、公的な役割を引き受けたりすることによって、不平不満を述べる立場から少しずつ「自分には何ができるか」という見方を身に付けることができます。そして、私たち教員の仕事もある意味では、自分より大切な者として教え子をみるときがあります。それは親の愛情とは程遠いものかもしれませんが、ある瞬間には自分のことはさておいて学級の子供のことを一番に考えていることがあります。自分のプライベートの時間を子供たちに割くことからしても、私たちの仕事は自分の感情だけで生きてはおられない、人のために自分の力を注ごうとする尊い仕事だと思っています。そして、ただ自分を犠牲にして、実を粉にして子供の教育にあたっているということではなく、自分より大切に思う子供の存在によって、何より自分自身を成長させてもらっているのだと感じます。

先日、学習発表会を参観いただきありがとうございました。どの学年もとても素敵でした。子供たちの姿にはもちろん感動しましたが、子供たちをより輝かそうと、子供たちを支え、懸命に努力する先生方の姿に感謝の念はつきません。

保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今後ともよろしく願います。(校長 村杉 一也)